

【一般演題4】 第16席

「『黄帝内經』における脈状浮・沈について」

京都 林 哲也

私達は、鍼灸臨床に際して常に脈診を行っている。鍼灸は“證”というものに随って施されるが、脈診はその“證”を捉える為の方法の一つである。脈は身体状態の表象の一つとして捉えられ、そのかたちによって用意された〈脈状〉というカテゴリーに分類され“證”というものに還元される。

この〈脈状〉というものは、原典の時代より今日に至るまで、脈書及び多くの医書中で論述されており、中国伝統医学の象徴ともいべき脈診の学の中核をなしている。しかしながら、中国伝統医学の歴史的変遷にともない、脈法や脈状についての認識も変化し、今日では甚だ混乱した状況となっている。従って、脈診を臨床に活用するには、先ず脈法、脈状についての錯綜した内容を各時代の文献の記述に基づいて整理検討していかなければならない。

本題では、その最初の作業として、『黄帝内經』のうち『素問』の経文中から脈状としての浮・沈の用例を抜粋し、その内容の検討を行った。